平安書簡の遊戯、非遊戯

服部嘉香

一

平安盛時の男女書簡数通を挙げてみる。そこには書簡の遊戯と非遊戯とがあり、書簡の中に人生が覗く趣がある。

この時代は、藤原道長が「わが世をばわが世とぞ思ふ望月の欠けたることもなしと思へば」と詠じた通り、藤原氏一族が現世礼讃の酔夢の中に権勢を振るっていた。多言を要しないが、道長の政治的手腕によって、荘園制度を確立、拡大して経済的実力を固め、皇室の外戚となって摂関政治の実権を握り、第一階級である天皇に代って第二階級としての宮廷貴族の威を示したが、かな文字の発達と共に発展した女房文学が媒体となって、政治も、文学も、生活も、遊びに溺れ、遊びに暮れるに至った。とはいえ、徒らに遊惰、享楽に荒んだわけではない。さもなければ一族は滅亡し、政治不在の日本そのものが衰滅したであろう。ここには四人の群像を選び、明暗を眺めてみたい。

藤原行成が道長の眷寵を受けていたことは周知の通りであるが、それを証するものとして道長が行成に充てた書簡の一例がある。平安書簡にはほとんど性別は認められないのであるが、この書簡は、さすがに王者の格式を見せた男性調で、一読しては即解しかねるほどの緊張味を見せている。

危急を知らす（藤原道長から藤原行成へ）

夢に見えたまへることあるを、今日は御病まうしなどもして、物忌かたくして、なにか参りたまふ。細かにはみづから。

委しくいえば、今日の御参内には、あなたに何か不祥なことでも起こりそうな夢見に、お姿をお見せになりましたので、病気と申し出られるかして、起居、飲食の慎しみを厳重にしてお引き籠りなさるようお勧めします。懸念を押してまで何で参内の必要がありましょう。委しくは、じきじき口上で、ということになる。

これには、『大鏡』「太政大臣伊尹」の章に一場の物語がある。右大臣実方の子の中納言朝成は、行成の祖父伊尹に対する蔵人頭の任官にからまる怨恨から、悪霊となって代々祟をするぞと誓を立てて憤死したことを道長は知っていた。ある夜の夢に、朝成が紫宸殿の後の通路に立っているのを咎めると、頭弁行成卿の参内を待っているのだと答えるので、行成にとって不便なことよと、この書簡を届けさせたのである。幸に、その朝に限り行成は別路を行ったので、祟もなかったが、そういう因縁を考え合わせると、道長の文は、一種鬼気を含むかの感さえある。書簡と人生、その現在性について考えさせるものがある。

筆蹟は見る由もないが、名文家行成の和文書簡、歌書簡の片鱗が『枕草子』に清少納言自身の消息と共に出ている。往返五通あるので、一括して仮に「逢坂の関の応酬」と呼んでおく。

逢坂の関の応酬（藤原行成、清少納言）

（行成から）後のあしたは残りおほかる心地なんする。夜をとほして昔物語もきこえあかさんとせしを、鳥の声にもよほされて。

（清少納言から）いと夜ふかく侍りける鳥の声は、まうさうくんのにや。

（行成から）まうさうくんのにはとりは、函谷関をひらきて、三千の客わづかに去れり。

（清少納言）夜をこめて鳥のそらねははかるとも世にあふ坂の関はゆるさじ

心かしこき関守の侍り。

（行成から）あふさかは人こえやすき関なれば鳥はなかねどあけてまつとか

以上の大意をいうと、○後朝は残り多い心地がする。話し明かそうと思ったのに、鳥の声に促されて早く帰ったのは口惜しかった。○その暁の鳥は孟嘗君の物真似、にせの鶏ですか。○孟嘗君の鶏は函谷関を開くに成功して、三千の食客が辛うじて駆け去ることができた。昨夜のは、それとは違って、あなたに逢いたい逢坂の関のことです。○夜の明けないうちに、鶏の物真似声を立てても、函谷関とは違って、逢坂の関は欺かれないでしょう。心きいた関守がいますから。○逢坂の関は越えやすいので、鶏の声を立てないでも明けてくれるそうです。あなたも待っていて下さるでしょう。

事は、その前日、禁中の御物忌のために行成は参内する。明くる朝早く、意味ありげに後朝の文を清少納言に送ったのである。『枕草子』の原文には、「ありし文どもを、はじめのは僧都の君いみじうぬかをさへつきて取り給ひき。

のちのは御前に。」とある。はじめのは、「後のあしたは」云々と書いた文で、関白道隆の子で、中宮定子の弟の隆円僧都までが、丁寧に額づいて懇請したので与えたというし、のちのは、「まうさうくんのにはとりは」で、これは中宮が取り上げたとある。この時は行成は二十五歳の弱冠ながら、すでに一代の能書家として敬愛されていたのである。

この応酬で今一つ注意したいことは、行成が清少納言の許へ忍び通う仲であったらしく見せかけている真意が何であったかという点である。懸想文(けそうぶみ)めいてはいるが、文は中宮も僧都も見ており、おかしみ性ばかりでなく、社交性、軽び性、美化性などの混和した平安人の明かるい遊びから来るのではないか。二人の交情がかなり深いものであることは、宮中の話柄でもあったので明きらかであるが、人目を憚らねばならんほどのものでなかったことは察せられる。軽く、明かるく、ふざけるのである。今一つ、その例を『枕』(しきし)から引用する。頭辨(とうのべん)の許からといって、主殿司(とのもづかさ)が、白い色紙に絵のようなものを包んだのを、満開の梅花の枝に結びつけて持って来る。あけてみると、餅餤(へいだん)というのを二つ並べて包んでいる。それに添えた文は、かしこまった竪文(たてぶみ)で、中は解文(げもん)の書式にして、

贈り物に添へて（藤原行成から清少納言へ）

進上
餅餤一つゝみ
例によって進上如件
少納言殿に
月　日
みまなのなりゆき
このをのこはみづからまゐらんとする
を、ひるはかたちわるしとてまゐらぬ
なり

上掲のように書いてある。餅餤は、餅に鴨、鵝などの卵、雑菜、塩などを交ぜて、煮て、方形に切ったもの。定時の宴席のあと、上卿以下諸臣に、三献または四献と共に賜わった。ここでは、そういう重々しいものに事寄せて書式は仰々しくして、しかし手軽に扱ったというおかしさを見せたのであろう。解文は解(げ)または解状(げじょう)ともいい、「公式令」によれば、八省以下、内外の諸司から太政大臣、および、その所管の官庁に出す公文書をいうとある。ふざけてはいるが、しかし謹んで、清少納言に捧呈する作法を採った。「如件」は往来体の書簡に頻出する常用語で、ここにも行成の文体好みが見えている。「みまなのなりゆき」は任那成行で、「任那」は下役の姓のつもり、「成行」は「行成」を逆にしたもの、世の中のこと、万事なりゆきに任すなどの意を寓したものか。『枕』の原文には、「このをのこ」云々と、いみじく、おかしげに書いたのを中宮に披露すると、「めでた

くも書きたるものかな。をかしうしたり。」と賞美して、「御文はとらせ給ひつ。」とある。当時は書道隆盛の頃でもあり、中宮は特に消息の名筆を聚集、愛蔵されていたので、行成のものを取り上げたのであろう。

この二人に名歌のないことはさびしい感をいだかせる。『大鏡』によって「世の手かき」と讃えられた行成は、「この大納言殿よろづにとゝのひ給へるを、和歌のかたにや少しおくれたまへりけん。」などと書かれている。歌論義の席で、歌のこと知らぬ恥をかいたというのである。清少納言も歌はあまり得意でなかったらしく、詩文についての自家自讃が『枕』に多く出ているにしては、歌に関する逸話が二、三に止まっているのは、さびしいのである。それにしても、逢坂の関の応酬の歌書簡は、共に名歌といっていい。

二

道長は、政治家であると同時に文学者であり、文学愛好者であった。愛好者として最も大きな功績は、『源氏物語』の完成に援助したことで、それがなければ、あの大長編は中絶したかも知れない。『源氏物語』の源氏のモデルの主要部分が道長であるのも、道長の恩義に感じつつ書いたがための成行であったかも知れない。それ以上の関係の有無について考えることは無用ではないが、行成と清少納言の交情と共に、想像の中に生かした方が正確になろう。あるいは、書簡が示す人生として、何かの機微が知られるであろう。

歌の応酬（紫式部、藤原道長）

○

女郎花さかりの色を見るからに露のわきける身こそ知らるれ（紫式部）

○

しら露はわきてもおかじをみなへし心からにや色のそむらむ（道長）

『紫式部日記』にある実話。式部が道長から、色美しく咲いた女郎花を渡され、即興の歌を詠めと促される。寝覚めの顔を隠しかたがた硯のそばに身を避けて「女郎花」の歌を書く。檀紙の用意があったか、紙屋紙であったか、あるいは宿紙か。直ぐにしたためて差し出すと、「あな疾。」と賞でて、硯を寄せさせ、「しら露の」の返歌を書く。

咲き盛る女郎花の色の美しさは、朝露、夜露の恵みです。その美しさを見たばかりに、美しくない私には、露が分け隔てをして十分に潤うしてくれない身の上だと思いやられるのです。――白露は差別待遇などしないであろうよ。

おみなえしが美しく咲くのは、美しくなろうとする花の心からのことであろうよ。――こういう往返である。式部の歌には、この女郎花は盛りを見せているが、自分は盛りも過ぎて美しくない。女郎花には露の恵みがあるが、衰えた私には殿の恩寵もない、と、いささかの怨情を含めている。女郎花の美しさは、源順の有名な詩句、「花色如ニ蒸粟一。俗呼為ニ女郎一。」（『倭漢朗詠集』）が歌っているように、絢爛な美しさではない。少しもっさりしたところがあり、式部もはでな歌には詠めないので、心にあってか、否か、恨みがましいことにかこつけて、顧みて他をいう道長の期待をはぐらかしている。仕方なく、心の持ちようでお身も美しくなれるよと、道長もさりげなく逃げている。往返とも、イギリス式の、露骨でないユーマーがありはしないか。

『紫式部日記』の終り近くにある歌書簡の応酬では、二人の心境に一段の接近があることが知られる。中宮の前に、源氏の物語があるのを見て、道長は、例の冗談をいい始めたついでに、梅の枝に敷かれている紙に、歌を書いて式部に与える。式部がそれに返歌する。

「すきもの」の歌の応酬（道長、紫式部）

○

すきものと名にし立てれば見る人の折らですぐるはあらじとぞ思ふ（道長）

○

人にまだ折られぬものをたれかこのすきものぞとは口ならしけむ

めざましう。（紫式部）

道長が、梅の枝の下敷にしてあった紙を引き出して、歌を書き、式部に与える。歌意は単純であるが、遊びとしても、かなり露骨である。すき者（酸・好）という評判が立っているのだから、見かけた人が折らないで（枝を折る、女を手折る。）見過してしまうことはないと思うよ。――まだ誰にも折られたことはありませんのに、誰がこの私を好き者だなどと、口を鳴らして（酸っぱくて鳴らす、いい立てる。）いいふらすのでしょう。……とんでもない。

また一歩を進めた歌の応酬がある。式部が渡殿へ通ずる戸口の局に寝ていると、戸を叩く者がある。恐ろしさに、ひっそりと身を縮めて夜を明かしたが、その早朝、文が来る。それが道長と分かって、返し歌をする。

「水鶏」の歌の応酬（道長と紫式部）

○

よもすがらくひなよりけに鳴くなくぞまきの板戸をたゝきわびつる（道長）

○

たゞならじとばかりたゝくくひなゆゑ明けてはいかにくやしからまし（紫式部）

夜通し、水鶏よりもはげしく、なくなく槇の板戸を叩くばかりで、つらかったよ。――ただごとではないことがあるかとばかり、思はせ振のほんのちょっとばかり、戸ばかり叩くだけで、実意をお見せにならない水鶏のことですから、明けては（戸を明ける、夜が明ける。）、どんなにか口惜しいことになったでありましょう。――道長は「夜もすがら」といい、式部は「と許り」という。押しつけとはぐらかしのうまさ、水鶏にかこつけての虚実のうまさ。道長のはからかい気味、式部のは憚かり気味。平安男女の風雅な遊びの一形が見える。これを見ても、紫式部の貞女ぶりが解る。（安藤為章『紫家七論』）との説もあるが、ここはそこまでかしこまる必要はない。式部は、初め、この時の人を道長とは知らなかったかも知れないが、平素の殊寵もあり、宿直の夜のことでもあり、常々、ただならぬ気持もあるかと思うぐらいのことはあったろうから、戸を叩く人は殿の外にないと直感したかも知れない。

ここで紫式部の書簡実力について考えてみたい。「いうまでもない。」の一語に尽きよう。

数え方によって異同は出るだろうが、『源氏』の書簡は凡そ三百三通、歌書簡は一百三十五通。その外、本文に、「今朝（けさ）の御文も」、「昨夜（よべ）の御文のさまも」、「御消息聞え給ふ」、「御消息ばかりは度々通ふ」、「御返りは」、「御硯のついでに」などとあって、一々書簡は出してないのが無数にあるし、源氏の君だけでも古川柳に「また文かそこらに置けと光る君」とあしらわれるぐらいで、平安朝物語の中では、書簡の最も多い作品であるが、ほとんどが巧拙を分かちがたい名歌、名文である。優れた文学作品の中に収められた同じ作者の歌文であるから当然であるが、それらが互に妍を競い、艶を匂わせ、しかも平淡の味を籠めているのは、文化材として尊い文学遺産といわねばならん。これが第一の功績である。

第二は情調ある新文体の樹立で、古今独歩といっていい。摸倣作品の文体が『源氏』を凌ぐものがないからである。末松謙澄、アーサー・ウェリー、その他の訳本があり、一応好評ではあるが、叙事風に流れ、文のニュアンスは写せていない。殊に、文にも、歌にも、漆着語としての、助動詞、助詞、前置詞、後置詞、挿入語などの生かし方、「待り」、「給ふ」、重ね言葉などの用い方によって、粘着力、音楽性を豊かにしている点は、外国語では及びがたいもので、紫式部はそれを自在に活用しているのである。

第三には文品ということ。これは情調ある新文体に伴な

うものであるが、それがおのずから貴族生活の描写に適しており、事の叙述と心の表現とが合体して、暗示的、象徴的に構成されている。いわゆる源氏名、五十四帖や人物の名に名づけられた名の大部分は、歌や、人物や、事件や、状態や、季節によるものであるが、みな巧みに特徴を捉えていて、おもしろい。伴蒿蹊が、「源氏物語の人名、紫のうへ、花ちる里、玉かづら、浮舟などの、類語によりて名づくるもあり、髭くろ、かをる、匂ふ宮の如き、そのさまによりて名としたるもあるは、神代の巻のおもかげなるべし。されば式部は日本紀をよく見たりと勅定ありしも、これら其の一つにやあらん。」（『閑田耕筆』）といっているのも大袈裟といえない。

第四に文体別ということ。男子は女子に対しては女消息の文体を用いるので、明きらかな性別の見えない例が多いのであるが、年齢別、身分別は、それとなく感じられるものが多い。例えば、明石入道の遺書にはその体臭があり、「関屋」の空蟬の文にはその匂いがあるといえるが、実例によって考えるより外はない。

第五に、『紫式部日記』、『紫式部集』の歌は事実による実作品と見られるに対し、『源氏物語』の書簡歌文は、物語の中の架空人物のもので、仮作品であるが、中には、作者が実際に入手したもの、ヒントを得たもの、作者が実際に用いようとしたものなどを利用したものがあるかも知れない。『紫式部日記』の消息の部分は、明きらかに実作書簡と見ることのできるものの、これには社交、達用の意識が稀薄であり、用途は訓誡、説得であるが、受信者が不明であり、書簡というよりは、一種の書簡体独白文といってもいいものかと思われる。

第六に、式部の真蹟が、物語でも、消息でも、日記でも、和歌でも、その断片でもが残存していたならば、感歎無上であろう。『紫式部日記』に、「源氏の物語、御前にあるを、殿の御覧じて、例のすずろごとども出できたるついでに……」とある。『源氏物語』の原稿を中宮も道長も見たというのである。その原稿の手蹟が、「本願寺三十六人集」ならどれでもいい、「高野切」ならば第二種の乙か。紫式部の性格、教養、趣味などからいって、細みがちな、端正な線質、それが想像される。伝紫式部の書としては、「古今和歌集」を書いた「久海切」が挙げられるが、書家相沢春洋は、表題の「古今和歌集巻第十三、恋五十八首」とある漢字が、「女筆とは受取り難き写経体であるのに驚く。」（『書道全集』第十五巻）と評している。なるほど、もっさりした味わいで、歌の部分の優雅、流暢の筆法は見えない。いったい、この当時の女流の眞筆がなぜ残存しなかったか。数は必ずしも僅少ではなく、むしろ平安女性の間では、消

息、和歌の贈答が賑わしかったのであるから、手跡の傳わらない筈はない。殊に、紫、清を始め道綱母、和泉式部、その他出色の才女の輩出した時代である。手蹟としても、消息伝小大君（三十六歌仙の一人）の「御蔵切（みくらぎれ）」や、大弐三位（紫式部の女）の「端白切（はたじろぎれ）」などもあり、伊勢、中務、伊勢大輔、藤原佐理の女、藤原斉信の女など、能書家の聞え高い人々である。断片でも残りそうに思われる。

これについて、傾聴すべき一説がある。『かなの歴史』の著者駒井鵞静は、「高野切」を書いたほどの名手世尊寺流二代の藤原行綱が、かなの名手であるが故に能書家の中に入っていない（悠紀主基の屏風歌揮毫を外されたことなど。）という矛盾がある。つまり、「能書」の定義が「漢字に於いて世評高き者」に限られていたので、かなの美を生命とした女性の能書家の名や作品が残らないのもそのためだと断定している。これから類推すれば、行成のかな消息は、中宮も隆円僧都も大切にしたが、一般には粗末にしたために、現存するもの皆無に近いことになったかとも考えられる。ともあれ、紫式部の眞蹟が残っていたならば、必ず妙筆であったであろうし、当代に輝き、後世の遺芳となったであろう。その遺芳を偲びながら、余情の深い書簡を二、三例示してみよう。

三

源氏十七歳の夏、雨夜の品定めの時には彼の心はそれとなく色めき立っていたのであろう、その明くる日の夜、方違へのために、空蟬の夫伊予介の中川の邸に泊りに行く。伊予介は任地にいて、留守である。源氏は強いて関係を結んでしまい、その後も、恋文を送ったり、事にかこつけて中川の邸に泊りに行くが、空蟬は避けている。あと幾日か経って空蟬へ文を書く、その時の描写が可憐なのである。初めに、「この子の思ふらむこともはしたなくて、さすがに御文を面がくしにひろげたり。いと多くて。」とあって、文がある。

源氏から空蟬へ（「帚木」）

見し夢をあふ夜ありやと歎くまに月さへあはでぞ頃も経にける

寐る夜なければ。

この消息は、歌は、――夢に逢うたように、現（うつつ）の世でもまた逢えるかと歎き待つうちに、逢うばかりか、上下の瞼の合うこともなく過すことよ、の意。

この文を持って来たのは、空蟬の弟の小君（十二、三歳）である。その夜のことは、侍女の中将はもちろん、小君も知

っていると思うので、照れくささに、源氏の文で顔を隠すようにして読んだとある。

やがてまた次の事件がある。最初の事件より十二年の後のことで、源氏は二十九歳、石山に参詣する途中、伊予介となって常陸から京へ上る夫と共に逢坂の関に差しかゝった空蟬の美々しい一行は、車を杉並木の蔭に避けたあと、帰路に、源氏は、今は右衛門佐となっている昔の小君を召して、文を空蟬へ持たせ、空蟬もそれに返す。

源氏から空蟬へ（「関屋」）

一日（ひとひ）は契り知られしを、さは思ひ知りけむや。
わくらはに行きあふ道をたのみしもなほかひなしやしほならぬ海

関守の、さも羨ましく、めざましかりしかな。

思いがけず出逢うこの一日は、よくよく宿縁の深さを思わせるが、そちらはどうか。――ゆくりなく逢う道（出逢道、近江路）を頼もしく、うれしく思ったのに、顔をも見ずに別れるのは、出逢うたかいもないことだ。うみとはいえ、塩分のない（もの足りない）湖（琵琶湖）のほとりで。――それに、夫が関守ででもあるように、わが物顔にそなたをいかめしく従えている様がけばけばしいまでに見えたことだ。

空蟬から源氏へ（「関屋」）

あふ坂の関やいかなるせきなればしげき歎きの中を分くらむ
夢のやうになむ。

逢ふという名の逢坂の関でせっかく出逢いながら、お目にかかれませんとは、この関所の何という冷たさでありましょう。このあたりの杉木立の繁りのように、隙もなく立ちこめた歎きの中を分けて行くばかりで。――まことに夢のようでございます。

どちらも夢見るようであったであろう。源氏は現実の中の夢、空蟬は夢の中の現実。源氏は皮肉を交え、空蟬は拒み続けたことを今更のように思い出したであろう。前にあった式部の余情添文「めざましう。」は、優美にいっているが、強い非難であるし、源氏の「めざましかりしかな。」は、皮肉にいっているが、哀感を含めている。ペイソスであろう。殊に空蟬の「夢のやうになむ。」は、源氏のその後の求愛を拒みつづけた空蟬の言葉としては、おや？と思わせるものがあるが、真実が色にほのめき出たのであって、これもまた、ペイソスの深さを感じさせる。といって、ピンクの色ではない。二人の間に長い間の複雑な感情のいきさつがあっただけに、古画の、いささか緑の薄れた渋い色

彩を見るような気持を誘われるといおうか。例えば、「帚木」の帖は雨夜の品定めによって有名であるが、後半の、源氏と空蟬の誤った愛欲の一条を描いたところは、事実の叙述も、心理の表現も、婉美、清淡の味わいに徹した連綿、流麗の筆致であり、すぐれた名文となっている。

四

本心は奥深く伏せておいて、言葉の上では、さりげなく、暗示的にかい撫でる文の文の出し方のうまみは、紫式部の特技中の特技である。一例として「葵」の帖にある六条御息所と源氏との間の往返を挙げるが、これには、特に息づまるもの、むしろ、息づまらないものがありながら、何かキーンとしたものを感じさせるものがある。皮肉や、怒りや、嫉妬などを相手にぶっつけたいそれを隠して、心ゆかしげに慰め、悔み、感激しているのである。

事は明きらかであるが、御息所は、源氏の寵漸く衰え、姫君（後の秋好中宮）が斎宮となって伊勢に下向されるので寂しくなり、御禊の日に、見物に出た御息所の網代車は、葵上との車争いに辱しめを受けた上に、葵上が源氏の種を宿して出産も程近いと知って、あれこれ嫉妬に駆られ、生霊となって葵上を呪い殺す。源氏はそれを見て、かつての夕顔を苦しめた物の怪のことなど思い合わせて怖れをなしたが、葵上は夕霧を産んで死亡する。その忌中に御息所の文である。

六条御息所から源氏へ（「葵」）

聞えぬほどは思し知るらむや。
人の世をあはれときくも露けきにおくるゝ袖を思ひこそやれ
たゞ今の空に思ひ給へあまりてなむ。

しばらく御無沙汰をしましたが、その間、御不幸をお歎き申しておりましたこと、お察し下さいましたでしょうか。——人生無常ときく（聴く、菊）だけでも涙ぐましくなりますのに、葵上さまに先立たれたあなた様の袖は、時節を盛りの菊の花に置く露のように、お涙で濡れそぼつことでしょう。今、正に仲秋の空、悲しげな気色に堪えかねまして、ひと筆を。

源氏から御息所へ（「葵」）

こよなうほど経侍りにけるを、思ひ給へ怠らずながら、つゝましきほどは、さらば思し知るらむとてなむ。
とまる身も消えしも同じ露の世に心おくらむほどぞはかなき
かつは思し消ちてよかし。御覧ぜずもやとて。たれにも。

長らく御無沙汰。その間にも、あなたのことは、つとめて心にかけておりましたが、心のうちは、「思し知るらむ。」

と仰せの通りゆえ、何も申しません。――あとに残る身も、さきに行く身も、同じ露の世のはかなさには変りはありません。その露の世に執心を残すのもはかないことですよ。――ですから、そのようなことは忘れることです。御潔斎中の忌のけがれにある身の消息では、直接には御覧になるまいかと思い、粗紙、乱筆のままで失礼します。誰にでも読ませて下さい。

御息所の書簡は、黒みがかった濃青の紙に書いた消息を、今にもパッと開くかと見える菊の枝に結びつけてあったという。気の利いたものよと取り上げてみると、御息所の筆蹟で、「常よりは優に」と見たが、また、「つれなき御とぶらひやと、心憂し。」ともいっている。自分で呪い殺しながら、白々しく悔みをいって来るのも不快だったが、あるいは、「おくるる袖」に、生き残りを嘲笑する底意があるかと思ったかも知れない。御息所は、潔斎中の人へ服喪中の者の消息は遠慮すべきだと思いながらも、わざわざの来信なので、「紫のにばめる紙」に返事をしたゝめる。紙は黒ずんで来た紫色のもので、相手を賤めた場合に用いた。「人々御中(おんなか)」のつもりでの処置と見せて、事実は憎しみからとも思われる。本文の「思ひ給へ怠らずながら」とあるのも恨みをからめての「怠らず」かも知れない。「かつは思し消ちてよかし。」も、いつまでも憂き世に、そしてわれらに執念を残すなとの暗示であろう。作者も、御息所は里の邸にいてその文を見ながら、「ほのめかし給へる気色を、心の鬼に著(しる)く見給ひて、さればよと思すもいといみじ。」と書いている。生霊のことを匂わせた源氏の真意を、鬼の心にもはっきりと気づいて、寵の衰えたのもそのためかと気づかれたのも哀れであった、というのである。

また語りたいことが多いが、他日に譲る。